

橋詰 潤¹: 報告—第40回日本植生史学会談話会Jun Hashizume¹: Report—The 40th forum of the Japanese Association of Historical Botany

2015年11月7日、8日の第30回日本植生史学会北海道大会に引き続き、11月9日に『北海道の植生と埋蔵文化財』をテーマに第40回日本植生史学会談話会が行われた。本巡見は、山田悟郎氏・三浦正人氏を案内人に、田口尚氏・高瀬克範氏・守屋豊人氏を世話人に開催された。主な見学地、施設は、1. 野幌森林公園、ふれあい交流館、2. 北海道埋蔵文化財センター、3. 北海道海開拓の村、4. 恵庭市郷土資料館、5. キウス周堤墓群、6. 美々貝塚、である。以下に各見学地、施設での巡見の概要を報告する。

1. 野幌森林公園、ふれあい交流館（札幌市、図1）

既に多くの植物が枯れ落ちている季節であったため、ガイダンス施設であるふれあい交流館で、公園内の動植物の特徴などについて説明をうけた。近年、外来種であるアライグマが増加し、エゾアカガエルやエゾサンショウウオなどの在来希少種の捕食や、アオサギの営巣放棄などの問題が発生しているとのことである。その後、公園内を散策し、北海道に特徴的な針広混交林植生の観察などを行った。

2. 北海道埋蔵文化財センター（江別市、図2、図3）

北海道全域の旧石器時代～アイヌ文化にいたる調査成果の常設展のほか、代表的な木製品並びに道内各地のテフラ堆積と遺物包含層の剥ぎ取り標本の見学を行った。ここでは、福島町館崎遺跡出土の黒曜石製石器に長野県産と産地推定されたものがあることを知った（北海道埋蔵文化財センター、2013）。これは長野県産と推定された黒曜石の産地推定結果としては、現時点で最も北の事例である。黒曜石研究センターに勤務する私にとって、今回の巡見で得ることができた望外の成果となった。

3. 北海道開拓の村（札幌市、図4）

北海道の各所から移設された、アイヌ文化期以後の北海道の発展に関わる建物等を見学した。ここでは、建築物の部材や、道具類に用いられた木材などから、材料となった各植物の南限や北限などの地理的分布についてや、北海道における植物質資源利用等について議論が交わされた。私は今回が初めての談話会参加であったので、率直にこうした植生史学会らしい、そして北海道での巡見らしい会話を楽しませていただいた。

4. 恵庭市郷土資料館（図5）

主に重要文化財カリンバ3遺跡の多種多様な漆製品や赤色顔料の利用と、柏木川4遺跡出土の縄文繊維製品について観察を行った。柏木川4遺跡出土の繊維製品については、11月7日の公開シンポジウムでの吉本忍氏の発表、「北海道の繊維製品と植物利用」で取り上げられた「織物」の実物を観察することができた。



図1 野幌森林公園ふれあい交流館から公園内を観察。



図2 北海道埋蔵文化財センター展示室。



図3 北海道内の土層剥ぎ取り標本と木製品を観察。

5. キウス周堤墓群（千歳市、図6）

ここでは、北海道の縄文期の大規模な土木技術について実見を行うことができた。なお、周堤墓群には立ち枯れしたウバユリが群生しており、これが咲き誇ったら壮観であ



図4 連続テレビ小説「マッサン」でも使用された建物前での集合写真(提供:箱崎真隆氏)。



図5 カリンバ3遺跡調査状況の模型の前でのレクチャー。



図6 キウス周堤墓群(千歳市)。

ろうと想像された。

6. 美々貝塚(千歳市)

現在の海岸線より17 kmほど内陸に位置しており、縄文前期に海岸線が最も内陸まで進出していた当時の状況を観察することができた。日もかなり傾き夕闇が迫る中、ライトを持ち込んで、ヤマトシジミを中心とする貝塚断面の露出展示施設の見学を行った。

前日まで不順な天候が続き、当日も天気心配されたが、なんとかぎりぎりまで持ちこたえ、見学が終わりバスに乗り込む直前まで雨に降られなかったのは幸運であった。今回の巡見では、北海道の植生のほか、1日で質量ともに充実した考古資料、遺跡を一気に実見できたのが最大の収穫であった。特に貴重な有機質遺物を多量に観察することができ、日常的には出土しないため、頭から抜け落ちてしま

いがちな情報を補完することができた。さらに、巡見中のバスの車中では、開拓記念館だけでなく自然系博物館や考古博物館の設立構想もあったことが語られたり、豊平川を渡る際には吉崎昌一先生によるカムバックサーモン運動の話がされたりと、豊富な話題が提供され移動中も巡見を満喫することができた。巡見を準備いただいた案内人、世話人の皆さま、そして月曜の休館日に展示、資料、各遺跡の解説をしていただいた各御担当者に感謝申し上げます。

引用文献

北海道埋蔵文化財センター. 2013. 調査年報 25. 49pp. 北海道埋蔵文化財センター, 北海道.

(〒386-0601 長野県小県郡長和町大門3670-8 明治大学黒耀石研究センター)

鈴木英里香¹：報告—第40回日本植生史学会談話会Erika Suzuki¹: Report—The 40th forum of Japanese Association of Historical Botany

テーマ：北海道の植生と埋蔵文化財

日時：2015年11月7・8日

場所：北海道博物館

案内人：山田悟郎氏、三浦正人氏

世話人：田口尚氏・高瀬克範氏・守屋豊人氏

第40回日本植生史学会談話会が第30回日本植生史学会と併せて上記の日程で開催された。談話会初参加の筆者は、貴重な史跡を見学できることもあり、とても楽しみにしていた。

集合場所の札幌駅からまず向かったのは野幌森林公園「ふれあい交流館」である。こちらでは「昭和の森」の森林植生と生物の特徴について解説していただいた(図1)。原生林は既に失われているそうだが、公園内には樹齢300年を超えるクリがあるそうで、研究発表でクリをテーマになさっていた方がいたこともあり参加者の関心は高かったが、与えられた時間内に見て回ることができない位置に生えていたため、見学はできなかった。「ふれあい交流館」を出た後は、「昭和の森」内では植物の観察を行うことになった。トドマツ・カラマツ・クロマツの簡単な見分け方や、トドマツがマツ属ではなくモミ属に分類されること、クマガザサの高さはその地域での降雪量を表すことなど、植物の逞しさに感心しきりであった。

次に北海道立埋蔵文化財センターへ伺い、千歳市ママチ土製仮面や美々8遺跡、アイヌ期の木製品を見学した。続縄文時代など北海道独特の土器はもちろん、クマの頭部を表現した木製品やへびが描かれた土器など、本土では見ることがない珍しい遺物が展示されていた。特にクマに関連した遺物が多く、北海道の人々とクマに強いつながりを感じた。

また北海道の火山について解説していただき、北海道各地で剥ぎ取った土層断面は茶系が基本の関東とは色や粒の大きさが全く違い、興味深かった。

次に「北海道開拓の村」へ伺い、旧北海道庁や石造建築、漁村群など明治から昭和までの貴重な歴史的建造物群を見学した(図2, 3)。レトロな雰囲気がとても良く、別の時代に迷い込んだような気がした。また、参加者は家屋に利用されている木材や建築様式に関する解説も何うことができた。敷地がとても広く、管理するうえでの苦労話なども何うことができた。ここで昼食となった。

午後に見学した恵庭市郷土資料館では、カリンバ3遺跡出土遺物(国指定重要文化財)が年に1度の公開期間にあたり、出土漆器類が展示されていた。墓坑内から出土したという鮮やかで精巧な作りの朱塗りの髪飾りに、筆者は目を奪われた。参加者の方々も口々に「素晴らしい」と言い



図1 野幌森林公園内を散策する参加者。



図2 旧北海道庁前で説明を聞く参加者。



図3 旧青山家漁家住宅を見学する参加者。

ながら、熱心に見学していた。その後、柏木川4遺跡から出土した縄文編布を拝見し、出土当時は作業員さんがつまみ上げることができるほど丈夫であったことなど、発掘調査に関わるエピソードなどもご披露戴いた。滅多にお目にかかれない貴重な資料であった。

次に千歳市キウス周堤墓群へと向かった。ここでは、カメラに一度で納めることができないほどの周堤墓の規模に圧倒された。参加者は周堤墓の中に降り、思い思いに見学していた(図4)。筆者が写真で知っている周堤墓とは迫力が段違いであった。また周堤墓の出入口部が少しくぼんでいたことは写真や図面から知っていたが、現地で見るとそのように周堤墓を築造した理由がわかる気がした。現地に足を運ぶ大切さを改めて学んだ。

最後に千歳市美々貝塚に向かった。貝塚が2メートル近く堆積しているところが観察でき、圧巻であった。美々貝塚はほとんど一時期に形成され破棄されたこと、出土している貝類はほとんどがヤマトシジミであることなど、縄文時代の人々の生活の一端を覗くことができた。最後は新千歳空港と札幌駅で解散となった。

車内では山田悟郎先生による開拓の村・埋蔵文化財センターなどの設立秘話が披露され、設立当初からいらした先生の貴重なお話や苦労話を伺うことができた。また、田口尚氏は道々で現在・過去に北海道で行われている発掘調査のお話をしてくださり、本土とは違う面白さや難しさ、ア



図4 キウス周堤墓群を見学する参加者。

クシデントを伺うことができた。

前日の天気予報は雨天であったが、天候がぎりぎり持ち、最終目的地の美々貝塚を出発するその時に雨が降り出すという幸運にも恵まれた。案内人をしてくださった山田悟郎先生をはじめ、様々な手配をしてくださった皆さま、休日にも関わらず施設を開放してくださった皆さまに、厚く御礼申し上げます。

(¹ 〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7-57 昭和女子大学 大学院生活機構研究科生活文化研究専攻)